

ハキダメガヤ (*Dinebra arabica* Jaquin) は熱帯アフリカ産のイネ科植物で、奥山春季氏が 1931 年山形県で採集され、本誌 19: 130 (1943) に命名発表したものである。この他にも小川由一氏が採集した標本が資源科学研究所にあったが、戦中に焼失してしまった。本年 (1965) 8 月 9 日、千葉大学薬学部長の荻庭丈寿氏により、高知市西部の海浜で採集されたので、大井、奥山両氏に検定してもらったところ、科学博物館所蔵のアフリカからの標本と引合せて、同一物と認定されたので、この植物が高知でとれたことをここに記録する。もちろんこんなものが残存すると思われないから、帰化植物にはなるまい。なお、奥山氏のとられた標本は科学博物館標品 No. 36384-5 で、その写真は私の「帰化植物」(1950) にある。

(東邦大学薬学部)

○ニオイシャジン小記 (北川政夫) Masao KITAGAWA: Brief notes on *Adenophora verticillata* Fisher

ニオイシャジンは日本のツリガネニンジンやサイヨウシャジンに近縁の大陸系の種類である。この学名として私は以前 *Adenophora tetraphylla* (Thunberg) Fischer を選んだこともあるが、それは誤りで、この名称は日本産の類につけられたものであるからニオイシャジンには当てはまらない。従って、本種の学名につき再検討を要するが、その前にこの種と日本のツリガネニンジン系の種類との種的な差異点を述べて見る。

ニオイシャジンは一般に丈が高く、最高のものでは 150 cm 位に及ぶ。葉は質がやや厚くて硬く、一節に 3~6 個宛輪生する。花序は細長く、枝は通常完全に輪生している。花は多数で小さく、長さは 1~1.3 cm ある。また最もよい特長は萼裂片にあり、それらは極めて小さく短く、のみ形をなし、全辺で先端はやや肉太くなり、色は黒味を帯び、長さは 1~2.5 mm 位しかない。花冠は筒状鐘形乃至鐘形をなし、濃碧色を呈する。こうした形質を参酌し、日本のものとは全然別の独立種として考える。この種もツリガネニンジンと同様に、葉の広狭、毛の有無に甚しい変化性を示し、学者によっては若干の細かい変種や品種に分けているが、結局連続変異に外ならず、無理に区別しなくてもよいようである。

本種は 1776 年に、Pallas 氏によって *Campanula verticillata* Pallas として発表されたのである。しかし、Hill 氏が 1765 年に同じ名を他種に用いている為無効名となる。次に、これを *Adenophora* 属に移した名は *A. verticillata* Fischer であるが、「植物命名規約」(1956) の Article 72 の Note の欄に従えば、こうした組合せは先行する異種同名のない場合基本種名と一応関係のない新名として採用することが出来る。故に、Pallas 氏の名を捨てて、改めて新形容語を用意する必要もないわけである。

以上をまとめて、次の如く整理する。

Adenophora verticillata Fisher in Mém. Soc. Nat. Mosc. 6: 167 (1823), emend. ut nom. nov.; De Candolle, Monogr. Campan. 356 (1830): Prodr. 7: 492 (1838), pro maj. part., excl. syn. *Campanula tetraphylla* Thunberg; Kitagawa

in Rep. First Sci. Exped. Manch. sect. 4, **2**: 114 fig. 14-11 (1935); M. Popov, Fl. Centr. Sib. **2**: 706 (1959).

Campanula verticillata Pallas, Reise **3**: 320, 422, 436, Append. 719 t. G fig. 1 (1776), non Hill (1765).

Adenophora tetraphylla (non Fischer) Kitagawa, Lineam. Fl. Mansh. 418 (1939); Fedorov in Fl. URSS **24**: 361 (1957); Baranov in Quart. Journ. Taiwan Mus. **16**: 159 (1963).

A. triphylla (Thunberg) De Candolle var. *angustifolia* (Regel) Kitamura in Act. Phytot. Geobot. **10**: 308 (1941) cum f. *princeps* (Korshinsky) Kitamura & f. *pilosa* Kitamura.

A. radiatifolia Nakai in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo **31**: 110 (1952), ut nom. nov.

Nom. Jap. Nioi-syajin (Nakai 1922).

Distr. Dahuria, Mongolia, Amur, Ussuri, Manshuria, Korea & China.

(横浜国立大学学芸学部生物学教室)

□岡見義男：ラン，種類と培養 A5 版 pp. 435 図版写真多数，アート紙刷，東京：誠文堂新光社 4.800 円 (1964 XII). 著者は一昨年物故されたが，永く新宿御苑で洋蘭の栽培，新品種の育成に努めた方で，その方の第一人者であった。いわゆる洋蘭（主として熱帯，亜熱帯産）の代表属 100 をとりあげ，属名の ABC 順に解説をほどこし，著名種を附記したもの。Schlechter の名著 *Die Orchideen* と似たところがあるが，本書の性格からみて分類学的な急所を望むことは少々無理である。しかし日本だけでなく，世界的に見て栽培にうつされた種がほとんど挙げてあることは，抄録者がアンデスで採集し，数年かかって開花させた *Xylobium* や *Houlletia* などの属や種ものっている位である事からわかる。それによいことは豊富な写真版で，原種はもちろん，適宜に選択された品種の姿がみられるのも大いに参考になる。培養法，栽培史などもついでいて便利である。
(前川文夫)

□桧山庫三：武蔵野の植物 pp. 290+51. 図版 48 葉 地図 1 葉，東京，井上書店 (1965). 1.400 円。地方植物志は今まで島か山を除いては，たいてい行政区画を基礎にしていたが，これは武蔵野という地形面を基準にして扱った点でまことに学問的である。目録はさすがに著者の性格と水準を反映して甚だ高く，その点でも将来へのローカルフロラの基準となるだろう。武蔵野というさして広くもなくまた変化に乏しい地帯によっても 1287 種が自生し，276 種が帰化しているとは，日本のフロラの豊富さを示すものか。本書の後半を占める検索表は苦心の作と見受けるが，方言をも引用し，それが索引にもひかれているなど，細かい心配りがしてある。印刷も美しいし，巻頭の図版も楽しい。武蔵野に限らず，都会を包含する地帯にも充分転用のきくものであって，ひろくおすすめしたい。
(前川文夫)